NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

余話　母子像

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16119623

ダイの大冒険, ヒュンケル, モルグ

不死騎団、進攻開始。
どうやって山を越えて進軍したのかは、またどこかのお話で。

本編１novel/15224774と密接な繋がりあり。

これも、フォロワー様のひとことから生まれた作品です。

ふたたび創作を始め、ありがたいことに、コメントやご感想をたびたびいただいております。
その中には、こちらの意図したことを受け取っていただいたご意見もあれば、作者の込めた思い以上のものを汲み取ってくださった方や、また異なる視点でご覧になってくださった方もいらっしゃいました。

そうしていただいたコメントやご意見の中に、時々、強く揺さぶられることがあります。
それがたった一言であったとしても、そういう見方があるのか、などと、新しい視点や考え方を与えられたり、また、そのようなものが求められているのか、などと、新たな作品への原動力になったりしました。
これまでの創作活動ではあまりなかった経験で、興味深いなと思っています。

こういったファン同士の交流が、新たな作品を作り出していくこと

もあるのだなと思い、また、そのようなきっかけをいただけてありがたいと思います。

余話　母子像

　そこには、古代のローブに身を包んだ女性の姿が描かれていた。
　磔台に吊るされ、今まさに処刑されようとしている男性。
　そして、彼の前に立つ、頭からローブをかぶった女性。
　彼女は、磔台の男性を背にして両手を胸の前で組んで跪き、自身の体で男性をかばっていた。
　その女性の手前に描かれているのは、槍を手にした複数の兵士。
　その槍の切っ先が、まさに、彼女を貫こうとしていた。
　空からは、パイプオルガンのように何本もの光が降り注ぎ、天使が下界の様子を見守っている。
　聖堂の最奥、祭壇の向こうに掲げられている大きなフレスコ画の中に描かれた世界だった。

　アンデットモンスターのモルグは、教会の扉を開けると、その中へ一歩、足を踏み入れた。
　この村は、すでに彼ら不死騎団が制圧しており、住民はみな逃げてしまった。彼らが信仰の場としていたこの教会も無人のはずであった。
　だが、モルグは、教会の奥へと足を進めると、祭壇の前に立つ人影に気付いた。
　この教会の祭壇があるその上には、左右に天窓が１つずつあり、そこから光が差し込んでくる。
　まだ貴重なガラスでは、大きな窓を作れなかったのであろう。小さなガラスを寄せ集めて作ったステンドグラスの窓から差し込む光は、複数の異なるガラスの中を通り、複雑な屈折を見せていた。
　その光が、左右から、ちょうど祭壇に集まるように設計されており、さながら、舞台照明のように一点を照らしていた。
　その光の集まる中に、白いマントを纏った男が佇んでいた。
　銀髪が陽光にきらめき、窓から差し込む光を反射して、複雑な輝きを作り出していた。その姿は、彼がそこにいるのがふさわしく思える、調和した絵だった。

モルグは思った。
　神の遣いのようだと。
　だが、真実、その光の中にたたずむ男は、死者を束ねる将であり、その手で血に濡れた刃をふるう魔王軍の軍団長であった。
　モルグは考えた。
　もし、この世に、本当に神話にある「地の底に堕とされた天使」というものがいるのであれば、それは、この男のような姿をしているのではなかろうか、と。
　モルグは、自らの主であるその男に、控えめに言葉をかけた。
「こちらにおいででしたか。」
　ヒュンケルは、振り返らなかった。変わらず、目の前のフレスコ画を見上げていた。
「『磔台の聖母子』・・・ですな。」
　モルグは、絵のタイトルを口にした。
　好んでよく描かれる宗教画のモチーフの一つであった。
「神の遣いである預言者の男性は、人心を惑わしたとして、時の権力者によって、磔刑に処されることとなった。だが、まさに処刑というそのとき、彼の母が身を挺して、彼をかばった。彼女の身体が処刑執行者の槍に貫かれ、命を落としたとき、それと引き換えにするかのように天使が現れ、男性を救った。
　そして、その女性は、天へと召され、聖母と称えられた。
　そんな神話でございましたな。」
　モルグは、この絵画の元になった物語を口にした。
　モルグの言葉を聞いたヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「俺には、母というものが分からん。
　世の中の母親とは、そういうものなのか？」
　モルグは困ったような声を出した。
「わたくしめも、もはや生前の記憶は乏しいですからな・・・。知識でしかお答えはできませんが、母は子というものを身を挺してかばうものだ、とは聞いたことがございますな。」
　だが、その執事の言葉に、ヒュンケルは失笑で応えた。
「ふん・・・どうだかな。この前の村の有様を見ては、とてもそうは思えんな。」

ヒュンケルが指す言葉の内容は、モルグにもすぐに思い当たることだった。モルグもうなずき、嫌悪感もあらわに眉をひそめた。
「・・・あれは、ひどうございましたな・・・。」
　モルグとヒュンケルは、この１つ前の村を攻め落としたときのことを思い返していた。

　魔王軍不死騎団の本拠地は、地底魔城である。
　地底魔城は、ホルキア大陸中央付近の山岳地帯にある。
　対して、王都パプニカは、ロモス側に面した海岸にあり、ホルキア大陸の南西部にあった。
　大魔王より、パプニカ王国の制圧と、王家の滅亡を下命された不死騎団長ヒュンケルは、地底魔城から南西に進路を取った。
　そして、その途中にある村々を制圧しながら進むこととし、制圧した村からは、武器弾薬のほか食料を接収することとした。
　住民の処遇については、大魔王からは明確な指示はなかった。
　しかし、この戦いの勝利の末には、魔軍司令ハドラーが地上の覇権を握ることを大魔王に許されていた。それは公言されていたことだったので、魔王軍では周知の事項であった。
　そのため、ヒュンケルは、この戦いは覇権戦争なのだと理解していた。
　地上の支配を誰がすべきかをめぐる戦い。
　そうであれば、敵は、現に権力を握っている王家そのものであり、一般市民は関係がないはず。むしろ、一般市民まで殲滅してしまっては、支配する対象もなくなってしまう。
　少なくとも、ハドラーはそのように考えていたはずであった。
　ヒュンケルは、地底魔城から南西に進軍することを決め、その進路上にある村や街を順に制圧していくこととした。
　そして、アンデッドモンスターを率いて地底魔城より出撃し、まず、最初の村の前に布陣した。
　村の周囲には、村全体を取り囲むように、木製の簡素な外壁が作られていた。
　ヒュンケルは、配下のアンデッドモンスターに指示をした。
「村を取り囲め。ただし、東の方角だけは開けろ。」

その指示を受けたヘルクラッシャーの男が、納得できかねるという顔で、ヒュンケルに聞き返した。
「・・・よろしいのでしょうか？」
「ああ。」
「何故・・・。」
「見ていればわかる。」
　そういうと、ヒュンケルは、村を遠巻きに不死騎団の軍勢で包囲をした。
　そして、村に向かって、矢文を射かけさせた。
　書面のくくりつけられた矢は、村に向かって飛んでいき、外壁の内側に消えていった。
　それからしばらく待ち、ヒュンケルは、不死騎団一軍の前に出て、村に向かって声を上げた。
「聞こえるか、村の者！
　我々は、魔王軍不死騎団である！
　我々の要求は一つだ！
　村を明け渡せ！！
　日没まで時間をやろう。
　それまでに、村を明け渡すか、我々と戦うかを選ぶがよい。
　我々に歯向かうのならば、容赦はしない！」
　ヒュンケルは、矢文につけた文書とほぼ同じ内容を、声も高らかに言い渡した。

　人々は、自分たちの村を取り囲んだアンデッドモンスターの大軍に驚愕した。
「な、なんだ、あのモンスターたちは！？」
「１５年前の魔王の城の方から来ているみたいです。」
「地底魔城？あんなものはただの遺跡じゃなかったのか！？」
　確かに、この村から山を隔てた目と鼻の先には、地底魔城があった。
　だが、１５年も前に滅びたはずの城だった。
「第一、山があるだろう！？それなのになんでこんな大軍が・・・！」

「わ、わかりませんっ！」
「いつの間に・・・。」
「誰も気づかなかったのか！？」
「どうする？」
「戦うのか？」
「いやいや、無理だろ！？」

　村を取り囲んだ不死騎団からは、外壁に囲まれた村の中で、家々の扉が開き、人々が右往左往するのが見えた。
「このまま日没まで待て。」
　ヒュンケルは、先ほど疑問を投げかけたヘルクラッシャーの男に指示をした。
　やがて、村の中があわただしく、複数の者たちが行き来する様子がうかがわれた。そして、しばらくすると、静かになった。
　すると、東の方角に布陣していた一群から、伝令が届いた。
　がいこつ剣士の男は、ヒュンケルの前に膝を折って、報告した。
「申し上げます！
　ヒュンケル様のご指示で開けた東の方角から、村人が逃げようとしております！！」
　すると、ヒュンケルは、慌てる様子もなく、がいこつ剣士の男に問うた。
「村人は、武器は持っているか？」
「はい。剣や弓、鍬を持っている者もおります。」
「分かった。
　武器を持っている者は容赦するな。
　殺せ。
　一人も逃すな。
　ただし、武器を捨てた者、武器を持ってない者は、逃がして構わん。後追いをするな。」
「はっ。」
　ヒュンケルの指示を受けると、がいこつ剣士の男は、すぐに取って返した。
　ヒュンケルは、側に控えていたヘルクラッシャーの男に語った。

「見ているがいい。すぐに、村人は、武器を捨てて散り散りに逃げる。」
「だから、わざと、東の方角を開けたのですか？」
「徹底抗戦されるとこちらの被害も大きいからな。やっかいだ。こうすれば、勝手に村が空になる。武器も接収しやすい。」
　ヒュンケルの言葉どおり、初めのうちは、東の方角から鬨の声が上がったが、すぐに静かになった。
　そして、日没よりもはるかに早い時間に、がいこつ剣士の男が、再度、報告に来た。
「申し上げます！ヒュンケル様のご下命どおり、武器を持って抵抗した者、歯向かった者は始末いたしました。村人は、一部、抵抗をした者もおりましたが、すぐに武器を捨てて逃げていきました。村の様子も見てまいりましたが、村人はおおむね逃げた様子です。」
「こちらの被害は？」
「数名程度にございます。ほぼございません。」
「わかった。
　ご苦労だったな。」
　ヒュンケルは、傍らのヘルクラッシャーの男、それに、ヒュンケルの背後で控えていた執事のモルグに声をかけた。
「行くぞ。」
　不死騎団の地上における初陣は、あっけないほどの勝利で終わった。

　ヒュンケルは、モルグらとともに、村の中を巡回した。
　がいこつ剣士の男の報告どおり、村の中は静まり返っており、人影はなかった。
　ヒュンケルは、村の様子を見て回りながら、配下のアンデッドモンスターたちに指示をした。
「剣や槍、弓といった武器については、すべて回収しろ。武器になりそうな斧や鍬、鋤も同様だ。鬼岩城に送る。」
「はっ。」
「麦や芋、干し肉などの日持ちする食料も確保しろ。我々には必要はないが、ほかの軍団には必要だ。」

「承知いたしました。」
　ヒュンケルの指示を受けて、次々に、アンデッドモンスターたちが村のあちらこちらに散ってゆく。
　モルグは、不死騎団の者たちの動きをある程度見守ると、ヒュンケルに声をかけた。
「武器を接収されるのは、こちらで使うためでございますか？」
「それもあるが、この場に残しておくと、ほかの村の者や、この村の者が帰ってきたときに、使われることもありうるからな。蜂起の目は摘んでおくべきだろう。」
「なるほど。」
「金属であれば、そのままでなくても、溶解させて打ち直すことができる。鬼岩城に送っておけば使い道はあるだろう。」
　モルグは、ヒュンケルの言葉に頷いた。
　軍を率いる指揮官というものは、常に様々な視点を持って、あらゆる局面を想定し、次々に判断を下す必要がある。ヒュンケルは、まだ若い軍団長であったが、その技能についてはすでに身に着けていた。
　すると、不死騎団各員の動きを見守っていたヒュンケルの元に、ヘルクラッシャーの男が駆け寄ってきた。
「ヒュンケル様！不審な小屋を発見いたしました！」
　ヒュンケルの顔色が変わった。
「詳細は。」
「はい、物音がいたしましたので、中を検（あらた）めようと致しましたが、扉が釘で打ち付けられておりまして・・・。」
　ヒュンケルは、その報告にいっそう不審さを抱き、問題の小屋の前まで、急ぎ足を進めた。

　小屋の前には、すでに不死騎団の者たちが集まっており、扉をこじ開けようとしていた。なるほど、ヘルクラッシャーの男の報告どおり、木でできた小屋の、これまた木でできた扉の各角が、釘で打ち付けられており、枠に固定されていた。
　小屋自体の大きさはさほどでもなく、納屋や倉といった風体であった。

「開くぞー！」
　がいこつ剣士の男の声がして、きしんだ音とともに扉の小屋が開いた。
　真っ暗な闇の世界に、陽の光が差し込んだ。
　それとともに小屋の中の様子が露わになった。
　ヒュンケルは目を見張った。
　小屋の中には、小さな影が、いくつも、うずくまっていた。
　扉がこじ開けられると、そのうずくまった丸い塊は、おびえたように、顔を上げた。
　そして、小屋の外をアンデッドモンスターたちが取り囲んでいるのに気付き、恐怖に震えた目をした。
　ヒュンケルは息をのんだ。
　傍らのモルグが、ヒュンケルよりも幾分か冷静な声を出した。
「・・・これは・・・子ども、でございますな・・・。」
　モルグの言葉どおり、小屋の中にいたのは、子どもたちだった。
　ざっとみて、１０人くらいだろうか。互いに支えあうように、固まってうずくまり、丸くなっていた。
　一番年長に見える者で、１２歳くらいの少年。
　１０歳くらいの少女が、３歳くらいの幼児を抱きかかえていた。
　５～６歳くらいの少年、少女。
　誰も彼もが、泥や埃で汚れた顔をして、おびえた、疲れ切った表情で、肩をすくめながら、絶望の混じった視線を投げかけていた。
　ヒュンケルは、状況を察し、拳をきつく握りしめた。唇を噛み、不機嫌そうな表情で小屋の中を見つめた。
　ヒュンケルと目が合った、一番年長の少年は息をのんだ。泣き出しそうな顔をし、歯の根も肌も震えているのであろう、蒼白な顔色をしていた。
　ヒュンケルとともに状況を察したモルグが、言葉を発した。
「大人たちが置いて行ったのですな・・・。足手まといになるから、と。」
　ヒュンケルがたどり着いた思考と同じ答えを、モルグは言葉にした。
　ヒュンケルは、忌々し気につぶやいた。

「・・・子どもとは、守るものではないのか？」
　少なくとも、ヒュンケルは父にそう教えられた。騎士道精神にあふれた父バルトスは、ヒュンケルに対し、女性と子どもは守るものだと教えていた。
　モルグはかぶりを振った。
「我々に包囲されて、取るものも取らずに逃げたのでしょうからな・・・。食料が足りなくなると、あるいは早く逃げられないからと、足手まといになる子どもを残していったのかもしれませんな。」
「・・・追いかけられないように、扉に釘まで打ってか・・・！」
　ヒュンケルは、いらだちを隠さずにうめいた。
　モルグは、ヒュンケルの指示を仰いだ。
「どうされますか？」
　ヒュンケルはしばし目を伏せた。
　視界を外したものの、彼の目の中には、窓もない、漆黒の闇に包まれた小さな小屋の中に押し込められ、おびえた目でこちらを見る子供たちの眼差しが焼き付いていた。
　武器も持てない子供だ。殺す必要はない。
　だが、不死騎団で保護をすることもできない。魔王軍として、そこまでの酔狂はできなかったし、そんな義務もなかった。そんなことをしては、軍規に障る。
　ヒュンケルは傍らのミイラ男に、手短に指示を下した。
「小屋の外に出せ。」
　ミイラ男は、ヒュンケルの命を受けると、ほかの数名の同族の男たちとともに、小屋の中に入っていった。
　子どもたちの悲鳴が上がる。
　だが、ミイラ男たちは、かまわず、年長の少年の襟首をつかみ、幼い少女を小脇に抱え、次々と、小屋の中の子どもたちを外に出していった。
　子どもたちは、小屋の前の開けた地面の上にまとめて座らされた。
　互いにこの先への不安をありありと顔に浮かべ、幼児はすでに泣き出していた。絶望を浮かべた目で、あたりの様子をうかがってい

た。
　ヒュンケルは、子どもたち全員が小屋の外に出たのを見ると、彼らの前に進み出た。
　そして、最も年長と思われる少年の前に立った。
「お前が、一番の年長者だな？」
　少年は、蒼白な顔のまま、うなずいた。
「ならば、この子どもらの兄として、お前に問おう。
　我々は魔王軍不死騎団だ。この村は、すでに我らの手に墜ちた。
　お前たち子どもになど関心はない。お前たちを保護する義理もない。
　だが、歯向かうのなら、子どもとは言え容赦はせん。
　選べ。
　すぐに村を出るか、歯向かって我らの手にかかるかだ。」
　迷う必要もない選択肢だった。
　少年は、ヒュンケルの前で何度もうなずいた。そして、上ずった声を上げた。
「で、出ます！すぐに！」
「ならば、南西以外の方向に行け。南西に向かったならば、子どもとはいえ、間諜と判断し、始末する。」
「い、行きません！約束します！」
　だが、すぐに不安な表情を浮かべた少女が、彼のシャツの裾を引っ張った。
「で、でも、お兄ちゃん・・・。食べ物も水もないのよ・・・。」
　少年は、その言葉に、戸惑った眼差しをしたまま、視線をさまよわせた。
　ヒュンケルは、彼らに関心がないとばかりに踵を返すと、傍らのモルグに声をかけた。
「モルグ。食料の回収はどうだ？」
「はい。まだ途中ですが、ご指示のものだけで結構ですかな？」
「構わん。」
「ハムやソーセージなどの加工肉、すでに焼かれたパン、チーズなどもございますが。」
「いらん。我ら不死騎団には不要なものだ。保存のきかないものは

他の軍団にも送れん。
なくなったとしても何ら支障はない。」
「かしこまりました。」
　そのやり取りを聞いていた少年少女たちは、顔色を明るくした。
　そして、ヒュンケルの背中に向かって、年長の少年は小さく頭を下げた。

　人間の大人どもは、余裕がなくなれば、自分たちの子といえども切り捨てる。
　この日の出来事は、ヒュンケルの脳裏にそのような印象を植え付けた。

　ヒュンケルは、教会の祭壇に掲げられた『磔台の聖母子』を見上げながら、先の村でのことを思い返していた。
　そして、傍らのモルグに、語り掛けた。
「俺には母親というものはわからん。
　だが、この絵のような、身を挺して子どもをかばう母親など、しょせん、物語の中にしか存在しないのだろう。だからこそ、聖母と称えられるのだろうな。」
　ヒュンケルは、皮肉めいた笑みを浮かべた。
　モルグも反論はしなかった。
「そうかもしれませんな・・・。
　ですが、おそらくは、こうありたいとの理想の姿なのかもしれませんな。」
「どうだかな。」
　ヒュンケルとモルグが他愛もない会話を交わしていると、不意に、教会の外から喧騒が響いてきた。
　ヒュンケルは、眉をひそめた。
「・・・騒がしいな。」
　モルグもうなずいた。
「例によって、武器と、保存のきく食料の回収を命じておりましたが・・・何かあったのかもしれませんな。」
　二人は、教会の外へ出ると、喧騒の方へと足を進めた。

モルグとヒュンケルは、村の広場に不死騎団の者たちが集まっているのを認めた。アンデッドモンスターたちが、何かを取り囲むように丸くなっている。
　ヒュンケルは、彼らの背後から声をかけた。
「どうした。なにがあった。」
　すると、しにがみきぞくの男が、ヒュンケルを振り返り、帽子を取って頭を下げた。彼は村の中では下馬していた。しにがみきぞくの男は、恭しくヒュンケルに報告をした。
「逃げ遅れた者を発見いたしました。」
　ヒュンケルは舌打ちした。
「またか・・・。逃亡すらまともにできんのか・・・。
　また子どもではあるまいな。」
　すると、しにがみきぞくの男は口ごもった。
「それが・・・。」
　ヒュンケルは、また年少者たちがまとめて置いて行かれたのかと思い、いらだちを隠さなかった。アンデッドモンスターたちの垣根をかき分け、その先に進み出た。
　そして、今度は違う意味で、ヒュンケルは意表を突かれることとなった。
　そこにいたのは、一人の女であった。
　若い女、そうは言っても、ヒュンケルよりは幾分か年上であろう女が、広場の地面に座り込んでいた。アンデッドモンスターたちは、彼女を取り囲んでいたのだ。
　その女は、長い亜麻色の髪を後ろでひとつに束ね、この地方独特の裾の長いワンピースに身を包んでいた。そして、胸元に何やら布の塊のようなものを抱きかかえていた。
　彼女は、自分を取り囲むアンデットモンスターの輪が割れたのに気付くと、顔を上げた。そして、彼らのただなかに立つヒュンケルに気付いた。
　彼女は、ヒュンケルの姿を認めると、驚きを隠さず、明らかに動揺した様子を見せていた。
　だが、それもわずかな時間のこと。

彼女は、すぐに意を決すると、ヒュンケルに向かって言葉を投げかけた。
「あ、あなたが、指揮官ですか？」
　ヒュンケルは、不死騎団長である自分に遠慮なく声をかけてくる彼女に違和感を持ち、眉をひそめた。手短に答える。
「そうだが。」
　すると、その女は、両腕を前に突き出し、必死の形相で、ヒュンケルに訴えかけた。
「お願いします！この子を助けてください！！」
「・・・どういうことだ？」
　いぶかしげに眉をひそめたヒュンケルの前に彼女が差し出したのは、布の塊と思えた。
　だが、その隙間からなにやら白いものが見える。
　それは、細く、小さな手だった。
　薄汚れた布の隙間から、小さな頭が、薄い産毛の頭髪がのぞいた。
　赤ん坊だった。
　赤ん坊を抱いた女は、さらにヒュンケルに訴えかけた。
「私はどうなってもいい！お願いします！！どうか、この子だけは・・・！」
　その女の迫力に気圧され、ヒュンケルは二の句が継げずに立ち尽くしていた。
　その様子を後ろから見ていたモルグのつぶやきが聞こえた。
「・・・どうなさいますか？」
　だが、普段、直ちに指示を下すヒュンケルが、このときは、モルグに言葉を返せなくなっていた。
　戦場にある赤子。
　その偶像が、彼に何かを訴えかけた。
以前も、このようなことがなかったか？
そうして、戦場で赤ん坊を拾い上げた者がなかったか？
あの子どもは・・・誰なのだ？
ヒュンケルの意識が、記憶もないはずの過去に捕らわれた。
　赤ん坊を抱いた女は、なおもヒュンケルに食い下がった。

「お願いします・・・！どうか、この子だけは・・・！！」
　すると、母の剣幕に驚いたのか、布でくるまれた赤ん坊が声を上げた。弱弱しく、頼りない泣き声が響き渡った。
　彼女はうろたえた様子で、腕の中の赤子に語り掛けた。
「ごめんね。怖かったね。お腹もすいたよね。」
　彼女は、抱き方を変えたり、揺らしたりして赤子をあやしたが、泣き止む様子はなかった。困った様子で視線をさまよわせたその女は、ヒュンケルたちに向かって、小さく頭を下げた。
「あ・・・あの・・・失礼します。」
　そういって、ワンピースの胸元を大きく下げた。白い、豊満な乳房が露わになった。
　そして、彼女は、胸に抱いた赤子を乳房に引き寄せた。赤子は、乳房に吸い付くと、一心にそれを吸い始め、静かになった。
　呆然としている不死騎団の面々の前で、その女は、居心地悪そうに頭を下げた。
「・・・すみません・・・こうしないと泣き止まないので・・・。」
　そう言って、申し訳なさそうにうつむいた。
　胸に赤子を抱く女。
　乳房に吸い付く赤ん坊。
　その光景が、今度は、ヒュンケルに、先程とは異なる強烈な既視感を呼び覚ました。
　いつか、こんな光景を見たことがあった。
　だが、母親の髪は亜麻色ではなかった。
　赤子はこんなに小さくなかった。
　ヒュンケルの記憶が彼に訴えかける。
　彼は、自分を襲った強い既視感に混乱した。
　どこでこんな光景を見たことがあったというのだ。
　母など知らないはずなのに。
　子に乳を与える女など、見たこともなかったはずなのに。
　目の前の女は、自分の命さえ危うい状況であるにもかかわらず、赤子に乳をやり、その命をつなごうとしていた。そして、腕の中の我が子に、愛おしそうに、慈しむ眼差しを向けていた。

その光景が、ヒュンケルの記憶を揺さぶった。
　幼いヒュンケルが、誰かと食卓を囲んでいた。
　すると、小さな乳児が、自分を抱く母の服を引っ張ってむずかった。
　その子を抱いていた女性は、優しく微笑みかけると、少し離れて服をたくし上げ、その子を抱きなおした。
　背を向けたその女性の背に、長い髪が流れる。
　漆黒の艶やかな髪が。
　それは実際に見たヒュンケルの記憶だったのか。
　あるいは夢の中で見た幻だったのか。
　どちらだったのかはわからない。
　だが、そのヒュンケルの脳裏に浮かんだ光景が、目の前の母子の姿に重なった。
　そして、その風景に、先ほどのモルグの声が色を添えた。
—母は子というものを身を挺してかばうもの。
　ヒュンケルは瞳を伏せた。
　生殺与奪を握られているこの状況下で、敵であるはずの自分たちに我が子の生を託そうとする。
命の危険が迫る中でも、赤子の命をつなごうとする。
　その姿に、言葉を返すことができなかった。
　ヒュンケルは、呻くようにつぶやいた。
「・・・我らは魔王軍だ。赤子を育てるすべは持たん。」
　ヒュンケルは、その言葉の裏にある、もう一つの言葉を飲み込んだ。
　そして、別の言葉をつづけた。
「・・・村を出ろ。戦う力のないものを殺すつもりはない。」
　それだけ言うと、ヒュンケルは、直ちに踵を返した。
「あ・・・ありがとうございます！！」
　背後から女の声が聞こえた。

　ヒュンケルは、再び教会に戻った。
　祭壇の奥のフレスコ画を見上げた。
　磔台の聖母子。

処刑される我が子を守った聖母。
　その槍の前に身を差し出し、磔にされた我が子を守るその姿が、ヒュンケルの脳裏に蘇った幻のような黒髪の女性の姿に重なり、そして、先ほどの亜麻色の髪の女の姿に重なった。
　その絵を見上げ、ヒュンケルはつぶやいた。
「俺は・・・母を知らない。
　父のようにもなれない・・・。」
　かつて、彼の父は、戦場で泣いていた赤子を拾い、我が子として育てた。その父のようには生きられない。
　同じ立場に立った今、ヒュンケルは父が自分に向けていた慈愛の大きさを思い知った。
　そして、我が子を守り、命をつなごうとする母の姿。
　一介の市井の女であるはずなのに、その姿は気高く尊かった。
　いつの間にか、背後にモルグが立っていた。
　モルグは、そっとつぶやいた。
「命をかけて子を守ろうとする母は、すべからく、聖母ですな。」
　ヒュンケルの脳裏にあった黒髪の女性は、小さな子供を胸に抱いていた。今考えれば、乳をやっていたのだろう。
　記憶の中で、その黒髪の女性は、幼子を腕に抱いたまま顔を上げ、ヒュンケルに向かって微笑みかけた。
　どこで見た風景なのかもわからない。
　現実に存在するのかすら定かではない。
　だが、その幼子を抱いた姿は、穏やかな微笑みは、彼の中に、母親とはそのようなものだという姿として、強く刻み込まれていた。